

# 江差町

檜山郡江差町

面積：109.57km<sup>2</sup>

人口：11,173人（男性5,413人 女性5,760人）

町の木：ヒノキアスナロ

町の花：ハマナス

町名の由来：アイヌ語「エサシ（昆布の意）」

ホームページ

<http://www.hakodate.or.jp/esashi/default.htm>



江差町  
福祉保健課長  
中川 洸

## 北前船が運んだ“調べ”

### “溜り（たまり）”が生んだ独自の文化

古来、人々は風や川、潮の流れといったダイナミックな自然のエネルギーを利用して人や物、技術や文化の交流をはかっていました。そして湖や河口、入江など自然の流れが止まり拡散する場所に居を構え、集まってきた人や物から新たな技術や文化を生み出してきました。こうした場所を“溜り”と呼んだのです。

江戸時代、風と潮の流れによって日本海を北上してきた北前船にとって、かもめ島によって強風や荒波から護られた江差港は、まさに“溜り”として最高の場所でした。

また、江差は周辺で大量に採れるニシンや厚沢部町・江差町を貫流する厚沢川や上ノ国の天の川流域から伐り出される良質のヒノキ材の“溜り”の場としても栄えており、北前船による“海の道”と内陸部へ通じる“陸の道”が出会う場所でもあったのです。その栄華は「江差の五月は江戸にもない」と謳われたほどで、北前船によって伝えられた関西文化を基調に江差独自の文化が生まれました。

### 正調江差追分の誕生

こうした“江差文化”を代表する唄が江差追分です。今や民謡の王様として全国的に有名な江差追分ですが、その誕生には“海の道”と“陸の道”が大きな役割を果たしています。

追分節のルーツは江戸時代に旧中仙道と北国街道が分岐する長野県の追分地方で唄われていた馬子唄だといわれています。旅人が別れを惜しむ様子を唄ったこの馬子唄は一種のはやり唄として各地に広まり、なかでも越後地方に伝わったものは舟歌として船頭たちに唄われるようになりました。唄い手が変わることによって唄の内容も変わり、蹄の音が波の音に、山野のメロディー

が海辺のメロディーに変化して越後追分となりました。この越後追分が北前船によって日本海を渡り、江差に伝えられたのです。

一方それより先、伊勢松坂の民謡「松坂節」が越後に入って祝唄の越後松坂となり、のちに「松坂くずし」として唄われていたものが江差に伝わり、謙良（けんりゅう）節として唄われていました。この謙良節の唄い手として評判の高かったのが、南部盛岡から江差に渡った琵琶師の佐之市こと座頭佐之屋市之丞です。佐之市は謙良節と越後追分をもとに江差追分の原型を完成させ、哀調あふれる調子で唄い広めました。

その後、江差追分は海辺に生きる江差地方の風土にとけこみ幾多の変遷を経ながら、愛好者の生活環境や労働形態の相違から、微妙な節回しや止め方に違いができ多くの流派が生まれました。この時期唄われた様々な江差追分は古調追分と呼ばれています。

その一つは浜小屋節といわれるもので海に働く漁夫や舟子達の労働歌として、また、浜小屋の遊興のなかで浜流し唄として唄われ、伴奏楽器として三味線、太鼓が使われました。また、成金趣味の親方や船頭衆が三味線に踊りをつけ座敷唄として発達させた新地節（または旦那節）といわれる流派や、主として町の北部に住む馬方衆や職人達によって愛好され発達した詰木石節や馬方節といわれる流派もありました。





北前船

こうしたなかで明治17年、三味線の名手であった老婆が座敷唄を基本として正調江差追分の元祖と言われる唄を完成しました。その後も各流派の唄は唄い継がれましたが、昭和10年、時の江差町長によりようやく正調江差追分が定められました。

### 唄から生まれた江差と世界を結ぶ“道”

こうして完成した現在の江差追分は、レコードに吹き込まれ全国各地に普及して「唄は追分、追分は江差」と謳われるほどに愛好されています。昭和38年から開催している江差追分の全国大会は今年で35回目を迎え、全国から350名の唄い手が集い3日間にわたり自慢の喉を披露しました。

この大会は各地の江差追分会145支部の予選で選ばれた人が出場するもので、過去には東京支部に所属するイギリス人が出場した例もあります。また、江差追分会はブラジルのサンパウロやアメリカのロサンゼルスにも支部があり、かつて海を渡って江差に伝わり新



江差追分全国大会

たな唄として生まれ変わった江差追分が、今や国境を超え広く親しまれているのです。

### もうひとつの“溜り”

江差港が江差を代表する歴史的な“溜り”とすれば、北海道で最初の「道の駅」となった国道227号沿いの「江差繁次郎浜」は江差に誕生したもうひとつの“溜り”です。繁次郎は江戸文化年間に生まれ明治の初めに60才くらいで死んだと伝えられる実在の人物で、大変頓知（とんち）にたけ、まち中に笑いを振りまいていたそうです。

そんな繁次郎の笑いの精神を地域起こしの核にしようと地域住民によって建立された繁次郎像ですが、当初は付近に駐車施設がなかったことから行政が地域住民のまちづくりを支援し、駐車場を整備。後にトイレ等を設置し「道の駅」として整備されました。このもうひとつの“溜り”を中心に、新たな人と物の交流が始まっています。



江差繁次郎浜（道の駅 江差）